

高等学校

平成 12 年 度

# 教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成12年度

教育研究員名簿（特別活動）

| No | 学区 | 学校名           | 氏名   | 備考   |
|----|----|---------------|------|------|
| 1  | 1  | 都立城南高等学校      | 加地孝成 |      |
| 2  | 1  | 都立八潮高等学校      | 中村文男 | 副世話人 |
| 3  | 2  | 都立青山高等学校（定時制） | 高橋一信 | 世話人  |
| 4  | 2  | 都立世田谷工業高等学校   | 法月隆彦 |      |
| 5  | 5  | 都立青井高等学校      | 黒後茂  |      |
| 6  | 5  | 都立足立新田高等学校    | 太田久人 |      |
| 7  | 5  | 都立足立工業高等学校    | 山本敢  |      |
| 8  | 6  | 都立篠崎高等学校      | 柴山進  | 記録   |
| 9  | 7  | 都立南平高等学校      | 遠藤彰  |      |

（担当） 教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 小山利一

# 目 次

|     |  |    |
|-----|--|----|
| I   | はじめに   |    |
| 1   | 研究の背景と主題設定の理由  | 2  |
| 2   | 研究のねらい   | 3  |
| 3   | 研究の方法  | 3  |
| II  | 先行研究の成果と都立高校生の意識調査の結果及び分析  |    |
| 1   | 高校生の適応感に関する調査  | 4  |
| 2   | 都立高校生の意識調査   | 5  |
| III | 実践事例   |    |
|     | 実践事例 1 生徒一人一人が積極的に仲間とかかわることによって<br>集団の一員としての自覚を深める指導の工夫<br>——ホームルーム活動を通じて文化祭演劇企画への挑戦—— | 8  |
|     | 実践事例 2 面接週間を利用した遅刻指導<br>——遅刻に対する意識を高め、学校生活の適応を図る指導の工夫——                                | 12 |
|     | 実践事例 3 生徒のリーダーシップと集団の一員としての自覚を深める指導の工夫<br>——2年間にわたる体育祭応援団の指導を通して——                     | 16 |
|     | 実践事例 4 連続した学校行事を活用し、集団の一員としての自覚を深める指導<br>——各行事のつながりを大切にするホームルーム指導——                    | 20 |
| IV  | まとめ  | 24 |

【研究主題】

学校生活への適応を図り、集団の一員としての自覚を深める指導の工夫

I はじめに

1 研究の背景と主題設定の理由

平成11年3月、高等学校学習指導要領が改訂された。今回の特別活動の改訂の要点は、国際化、情報化や科学技術の発展などに伴い、社会が大きく変化する中で、「特別活動の特質を生かし、好ましい人間関係の醸成、基本的なモラルや社会生活上のルールの習得、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度の育成、ガイダンスの機能の充実などを重視する観点に立ち」行われたものである。

私たちは、勤務校で接している生徒の実態や教員（学校）の実態を以下のようにとらえ、それを踏まえて課題を設定することとした。

【生徒の実態】

- 学校に魅力を感じない生徒がいる。
- 目の前の安易さに目を奪われて、不登校に陥る生徒もいる。
- 学校行事に対する積極性に欠け、教員の動機付けに対し生徒が引いてしまう。
- 目立ったり、浮いてしまうことを極度に嫌がる生徒が多い。
- ホームルーム内に名前を知らない生徒がいる。
- 他校や出身中学校の友人関係が主で、学校内で友人を作ろうとしない生徒がいる。
- 人とのかかわりが苦手な生徒が多い。
- 目標をもって生活している生徒は生き生きしている。
- 学校を辞めて、表情が明るくなった生徒がいる。

【教員（学校）の状況】

- 生徒の自主性を引き出す「教員と生徒」や、「担任と生徒」の関係が希薄である。
- 目立たない生徒への対応が不足している。
- 学校行事に取り組まない（取り組めない）生徒への対応に苦慮している。
- 自分の個性が発揮できないと感じている生徒に、学校としてどのように組織的に取り組んだらよいのか悩んでいる。
- ホームルーム活動に計画性が乏しく、事務連絡や行事指導の時間になっている。
- 学校行事の指導が教員主導型から抜け切れていない。

以上のような実態を踏まえ、以下の4点に課題を設定した。

- (1) 生徒の学校への適応感をどう高めるか。
- (2) 集団の一員としての自覚を意図的、計画的に深め、人間関係を育てるにはどうしたらよいか。
- (3) 生徒に基本的な生活習慣や社会規範を身に付けさせるにはどうしたらよいか。

(4) 特別活動への教員のかかわりはどうあったらよいか。

こうした課題を解決するため、私たちは次の仮説を立て、研究を進めることとした。

#### 【研究の仮説】

- (1) 生徒自身が、集団の中で「一番」でなくても、「唯一」である事を相互に認め合うことにより、集団内で自分の位置付けを確認できるのではないか。
- (2) 生徒一人一人が明確な役割分担をもち、その任務を実行し成果を上げることで、集団の一員としての自覚を得ることができるのではないか。
- (3) 学校行事を行う際には、教員が生徒とともに、意図的・計画的に取り組むことにより、生徒が集団の一員としての自覚を深めることができるのではないか。
- (4) 教員が意図的・計画的に生徒指導を行うことで、学校生活の充実と向上に関する生徒の自覚が深まり、不登校や遅刻問題への指導効果が現れるのではないか。

以上の仮説を実証するために、

**「学校生活への適応を図り、集団の一員としての自覚を深める指導の工夫」**  
を研究主題とした。

## 2 研究のねらい

- (1) ホームルーム活動において、生徒相互の協力の大切さを学ぶ。
- (2) 一人一人を大切にされたホームルーム活動で、人間関係を広げたり、学校生活への適応を図る。
- (3) 自分の考えを相手に伝え、また相手を理解することで集団の中の自分を実感させる。
- (4) 目的達成の喜びを他人と共有することで、集団の一員としての自覚をうながす。

## 3 研究の方法

- (1) 勤務校の生徒の実態を出し合うとともに、適応感等に関する先行研究を収集し、高校生の現状を把握する。
- (2) 高校生の現状を改善するための指導法を工夫し、実践を通して検証する。
- (3) 実践研究を下記の内容とすることとし、生徒の学校への適応を図る指導と集団の一員としての自覚を深める指導内容や方法を工夫し、その実証を試みる。
  - 実践事例1 ホームルーム活動を通じて文化祭演劇企画への取組み
  - 実践事例2 面接週間を活用した遅刻指導
  - 実践事例3 体育祭に向けた応援団指導
  - 実践事例4 各行事のつながりを大切にするホームルーム指導
- (4) 特別活動の取組みによる生徒の意識の変化を知るため、取組み前後に意識調査を行い、その結果を分析・考察する。
- (5) ホームルーム活動などを通して取り組んだ特別活動について「自己評価」を行い、学校生活への適応や集団の一員としての自覚が深まったかどうかの、実証授業を行う。

## II 先行研究の成果とアンケート調査の結果及び分析

### 1 高校生の適応感に関する調査

#### (1) 潜在的な不適応感

本研究を進めるに当たって私たちは、高校生の適応に関する先行研究を調べることで、私たちの研究構想に誤りがないかを検証した。

様々な先行研究を調べると、学校不適応の最大の原因が学校における教員や友人との人間関係であることが指摘されていた。生徒は人間関係でつまずきながらも、人間関係で支援され、援助されて生きる力をつけていくと思われる。生徒が学校を続けて行くための重要な要素である。

平成9年度東京都教員研究生研究報告書の「高校生の学校適応と学校生活における人間関係との関連について」(都立池袋商業高等学校 教諭 梶 由紀子)の研究によると、生活の乱れや無気力から欠席や欠時となり単位修得困難な生徒が存在する。彼らは教員にとって手がかかると感じる生徒である。しかし、彼らは周囲とのかかわりの意識や自分についての意識が必ずしも強い否定ではない。他方、教員にとって手がかからず、欠席も少なく、成績も悪くない生徒の方が周囲とのかかわりの意識や自分についての意識が否定的であり、自己肯定感が低い傾向がある。

また、「青年期の不適応徴候を示す生徒の発見と対応」(沖縄県立美里工業高校 教諭 新垣ひろみ 1999)の研究の中にも、入試の倍率も高く、優秀で、出席状況も良く問題などあるはずもないと思われる生徒ほど実際内面に深い悩みがあり、不適応感をもっている生徒が多いという指摘がある。

岩手大学教育学部研究年報(1990)研究論文の中には、「精神病を伴わない、長期に及ぶ無気力・社会的引きこもり状態の研究に、初発症状として不登校などの割合が高いと指摘されるなど、学校不適応がその後の社会的不適応につながるサインである。」としている。さらに、同年報の研究論文(中学生の学校不適応における状態の検討 1999)の中で、「学校回避感情を持っている不登校潜在群は欠席群と同様に約40%の生徒が学校での集団とのかかわりや友人関係などに問題がある」としている。「集団体験の不足が指摘されている現在、生徒同士の相互作用を活用した介入が求められている」と指摘している。

以上のことから欠席群と同様に不登校潜在群の生徒及び教員にとって手間がかからず、学習に問題のない生徒にも予想以上に不適応感があることが分かる。これは私たち教員が実際に指導する際に忘れてはならない視点のひとつである。問題行動が表面化している生徒にだけ目が奪われがちであるが、生徒一人一人に関心を示し、授業・学校生活の場、そして特別活動の諸活動などにおいて、将来の社会的不適応を防ぐためにも意図的・計画的に教員から働きかけていく指導の工夫が大切である。

#### (2) 都立高校の中途退学者(全日制課程)

平成11年度における都立高等学校中途退学者等の調査結果によると、退学者は4,530人である。これは1校当たりの平均退学者数で21.8人、対生徒比率(退学率)では3.2%になる。前年度と比較すると、退学者数は689人の減少、1校当たり平均退学者が3.3人、退学

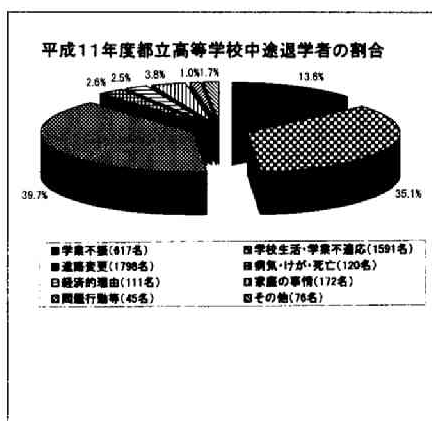
率は0.4%の減少となっている。

過去5年間の都立高等学校の中途退学率を見ると、平成7年度3.3%、平成8年度3.6%、平成9年度3.6%、平成10年度3.6%、平成11年度3.2%と、平均ほぼ3.5%前後である。この中で特に平成11年度都立高等学校中途退学者の理由別内訳を見ると、進路変更1,798人、学校生活・学業不適応1,591人になる。両者合わせて中途退学者全体の約75%にもなる。

過去5年間の都立高等学校の中途退学理由「学校生活・学業不適応」の占める割合は次の資料1・2のようになる。

この資料から読みとれることは、中途退学者の人数は年度により増減はあるものの、「学校生活・学業不適応」の理由による中途退学者の占める割合が平成8年度以降年々増加している。今後さらに、高校生活に不適応を起こし、中途退学する生徒の構成比が増加することが予想される。こうした状況を打開していくために、その要因になっている「集団体験の不足」を学校生活の中で意図的・計画的に補っていく必要がある。本部会では特別活動を通じて、生徒相互の関係や社会性の向上をめざした指導が更に重要視されるように思われる。

資料1



資料2

過去5年間における中途退学者理由「学校生活・学業不適応」の占める割合

|           | 平成7年  | 平成8年  | 平成9年  | 平成10年 | 平成11年 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 退学者数      | 5,316 | 5,430 | 5,320 | 5,219 | 4,530 |
| この理由の退学者数 | 1,687 | 1,558 | 1,717 | 1,791 | 1,591 |
| 退学率       | 3.3   | 3.6   | 3.6   | 3.6   | 3.2   |
| 構成比(%)    | 31.7  | 28.7  | 32.3  | 34.3  | 35.1  |

## 2 都立高校生の意識調査

### (1) 目的

特別活動の取組みによる、高校生の「学校生活への適応」と「集団の一員としての自覚」の変化を調べる。

### (2) 方法

高校生の「学校生活への適応」と「集団の一員としての自覚」が、特別活動の前後でどのように変化するか、アンケートを用いて調べた。質問項目の種類と項目数は以下の通りである。

- |                       |           |          |
|-----------------------|-----------|----------|
| ① 「学校生活への適応」に関する質問    | ……………21項目 | } 合計43項目 |
| ② 「集団の一員としての自覚」に関する質問 | ……………16項目 |          |
| ③ その他の質問              | ……………6項目  |          |

「高校生の意識調査に関するアンケート」のお願い

私達、特別活動部会は、「学校生活への適応を図り、集団の一員としての自覚を深める指導の工夫」を主題として研究しています。このアンケートは、HR活動や学校行事等を通じて、みなさんの意識の変化を調査し、今後の有意義なHR活動や学校行事づくりに役立てていく為のものです。回答に御協力ください。

- Q01 学校に行くのが嫌になることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q02 ズル休みをしたと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q03 学校に遅刻することがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q04 時間を守ることは大切だと思いますか？  
①思う ②少し思う ③あまり思わない ④全然思わない
- Q05 授業をサボりたいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q06 勉強に不安を感じることはありませんか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q07 学校に来て、早く帰りたいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q08 休み時間など、教室にいるのがつらいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q09 友達関係に不安を感じていますか？  
①すごく感じている ②少し感じている ③あまり感じている ④全然感じている
- Q10 クラス替えをしたと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q11 一人になりたいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q12 罵んだり、物を壊したりしたくなることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q13 勉強するのが嫌になることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q14 何もしたくないと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q15 高校を辞めたいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q16 寂もなくてムカつくことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q17 学校行事(遠足・文化祭・体育祭等)に参加するのが面倒だと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q18 卒業できなくていいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q19 はやく社会人になりたいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q20 あなたは将来の夢について考えることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q21 アルバイトをしたいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q22 中学校生活の方が、高校生活よりも良かったと思いますか？  
①すごく思う ②少し思う ③あまり思わない ④全然思わない
- Q23 高校生が化粧をしたり、髪を染めたり顔色することは、悪いことだと思いますか？  
①思う ②少し思う ③あまり思わない ④全然思わない
- Q24 高校生の飲酒・喫煙は悪いことだと思いますか？  
①思う ②少し思う ③あまり思わない ④全然思わない
- Q25 校則を違反することがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q26 先生に会ったときに、挨拶をしますか？  
①必ずする ②時々する ③あまりしない ④全くしない
- Q27 先生と話をすることが面倒だと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q28 友達と話をすることが面倒だと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q29 友達に会ったときに、挨拶をしますか？  
①必ずする ②時々する ③あまりしない ④全くしない
- Q30 友達との関わりの中で、自分自身を真面目に表現できないことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q31 自分と考えが違う人がいてもいいと思うことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q32 自分の居場所がないように感じることはありませんか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q33 自分に自信がもてなくなることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q34 人に勢力をふるいたくすることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q35 何かを快く思わないときに、自分で判断できないことがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q36 今の自分が、自なしと感じることがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q37 友達が頑張っているのを見て、感動することがありますか？  
①よくある ②時々ある ③あまりない ④全くない
- Q38 高校に入学してきた友達と一緒に、何かやっていることがありますか？  
①結構ある ②少しある ③あまりない ④全くない
- Q39 高校時代にやっておきたいと思っていることが、何かありますか？  
①たくさんある ②少しある ③あまりない ④全くない
- Q40 何か悩みがあったときに、相談する友人がいますか？  
①結構いる ②数人いる ③あまりいない ④いない
- Q41 人との約束を破ったときに、罪の意識を感じますか？  
①よく感じる ②少し感じる ③あまり感じない ④全然感じない
- Q42 人が困っているのを見て、助けてあげたいと思いますか？  
①思う ②少し思う ③あまり思わない ④全然思わない
- Q43 友達が頑張っているのを見て、心から拍手をおくれますか？  
①おくれる ②少しおくれる ③あまりおくれる ④全くおくれる

アンケート用紙には、「学校生活への適応」に関する質問と「集団の一員としての自覚」に関する質問が順不同に並べてある。また、「学校生活への適応」または「集団の一員としての自覚」には直接関係はないが、ホームルーム担任としてホームルーム運営上、参考となる質問を6項目付け加えた。

(3) 実施方法

1校につき1クラスを対象に、2度アンケートを実施した。1度目のアンケートは特別活動の前に、そして2度目のアンケートは特別活動の後に実施した。アンケートは2度とも同じものを使った。アンケート実施該当校は3校(全日制課程)である。それぞれの学校の特別活動内容とアンケートの実施時期は下記のとおりである。

| 学校 | 生徒数 | アンケート① | 特別活動内容        | アンケート② |
|----|-----|--------|---------------|--------|
| A校 | 35名 | 9月     | 文化祭の演劇指導      | 11月    |
| B校 | 29名 | 9月     | 面接週間を利用した遅刻指導 | 11月    |
| D校 | 41名 | 9月     | 水泳大会、体育祭、文化祭  | 11月    |

(4) 点数化

1つの質問事項に対して4つの答え(選択肢)を用意し、点数化した。

(例) 学校に行くのが嫌になることがありますか？

①よくある(0) ②時々ある(1) ③あまりない(2) ④全くない(3)

このような点数化によって、ホームルームでの「学校生活への適応」と「集団の一員としての自覚」の達成度を、それぞれ百分率で算出した。



ア 「学校生活への適応」に関する質問項目例

Q 0 1 学校に行くのが嫌になることがありますか？

Q 0 2 ズル休みをしたいと思うことがありますか？

イ 「集団の一員としての自覚」に関する質問項目例

Q 0 4 時間を守ることは大切だと思いますか？

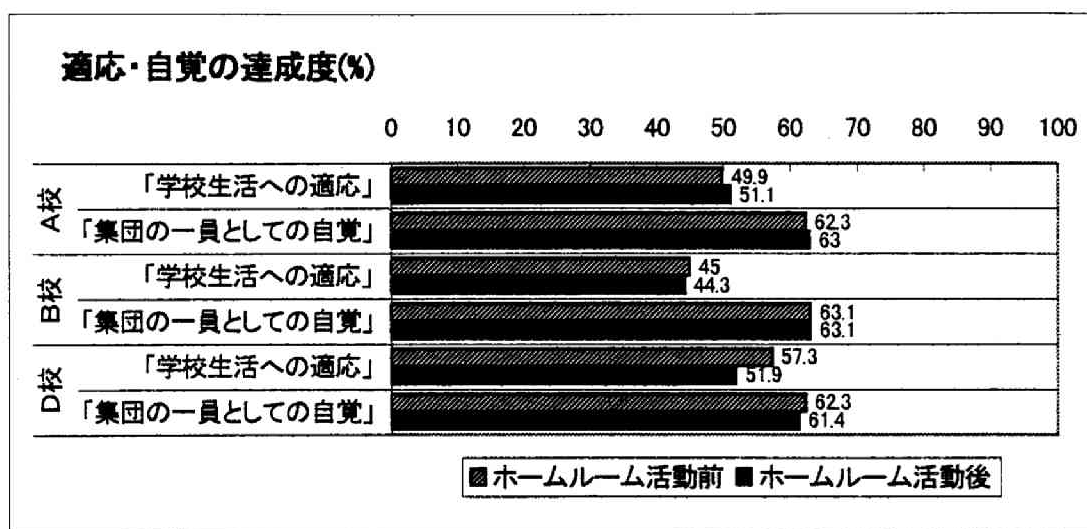
Q 0 9 友達関係に不安を感じていますか？

ウ その他の質問項目例

Q 0 6 勉強面に不安を感じるがありますか？

### 3 考察

(1) アンケート結果



(2) アンケート結果の分析

夏休み明けの2学期は、どの学年でも中だるみの時期と言われている。この時期の特徴として、学習意欲の低下や基本的な生活習慣の乱れなどが、時間とともに増加する傾向にある。その結果として、生徒の学校への適応感が低下したり、集団の一員としての自覚が薄れてきたりする。そこで、意図的に学校行事やホームルーム活動を行うことで、学校生活の充実と向上に関する生徒の自覚が深まり、集団の一員としての存在感を得ることができるのではないかと、研究の仮説を立て実践した。

その結果、上記のグラフの数値から、各校ともホームルーム活動の前と後とでの「学校生活への適応」と「集団の一員としての自覚」の達成度はほとんど変わっていない。本部会では、このことについて特別活動の取組みによって、学校への適応が図られ、集団の一員としての自覚を維持することができたと考えてよいのか、議論となった。

研究の仮説が甘かったのではないかと。調査の時期に問題はなかったか。2学期という時期を考えると、十分ではないにせよ一定程度の効果があったと見ることはできるのではないかと。等々である。今後更に研究を深めていく必要がある。

### Ⅲ 実践事例

#### 実践事例1 生徒一人一人が積極的に仲間とかかわることによって

##### 集団の一員としての自覚を深める指導の工夫

##### ——ホームルーム活動を通じて文化祭演劇企画への挑戦——

#### 1 学校の実態

A校は今年度で創立24年目を迎え、ここ数年は中学生の減少の影響を受けて、受験生のほぼ全員が入学しており、様々な悩みを抱えている。そんな中で“再生”をかけて、2年前には制服を一新し、学校行事などを通して生徒一人一人が学校に対する帰属意識を持ち、生き生きとした学校生活を送れるように生徒と教員がともに努力をしているところである。

#### 2 生徒の実態と指導のねらい

A校の1年3組には、明るい生徒が多いが、仲良くなった一部の仲間以外には積極的にかかわろうとしない傾向がある。また、少々面倒だったり困難なことに対して、果敢に立ち向かうチャレンジ精神もやや乏しい。このような実態を少しでも打開するために、文化祭に臨むに当たって、下記のような目標を設定した。

- |     |                               |
|-----|-------------------------------|
| 目 標 | ①積極的に多くの仲間とかかわり協力し合える。        |
|     | ②各自が自分を生かせる場で責任を全うする。         |
|     | ③臆することなく、自分の力を発揮できる（自己表現できる）。 |
|     | ④リーダーシップがとれるようになる。            |

#### 3 ホームルーム担任の文化祭に対する思い

やるからには全員参加で臨んで感動して終わりたい。全員で協力し合いながら、思い出に残るものにしたい。そして、上記のような目標も達成したい。それには「演劇」がよいのではないか思った。ただし、ホームルーム担任（以下、「担任」とする）の一方的な押し付けにならないように配慮を心掛け、アンケートとその結果をホームルーム通信に載せて発表しながら慎重に提案までこぎつけていった。

#### 4 取組み

##### (1) 文化祭への取組み“ファーストステージ”スタート！どんな文化祭にしたい？

まず第一段階のアンケートで、文化祭に対する抱負や期待感、成功させるために必要なことなどを調査した。結果は担任のほぼ願いどおりで、比較的多くの生徒が文化祭に対するしっかりした自覚と意識をもっていることが分かった。まさに「演劇」を提案しやすい結果が得られたのである。担任が自ら提案することについては、実行委員やクラス文化祭係の生徒に事前に伝えた上で行った。提案に当たって、「演劇」は一人一人が確実に役割分担ができて、各自がその役割を遂行して成功を遂げられるものであることを精一杯強調した。

##### 《アンケートの質問項目》

- |     |   |
|-----|---|
| Q 1 | 中学の文化祭はどんなだった？（中学時代を振り返ってみる）                                      |
| Q 2 | 高校で初めての文化祭をどんなものにしたい？（文化祭への抱負・期待）                                 |
| Q 3 | Q 2の回答を達成するために、また3組の企画を成功させるために、どんな努力が必要か？（文化祭に臨むに当たっての自覚、責任への意識） |
| Q 4 | やってみたい企画は？（具体的な企画案）   |

《多数あった回答》

Q 2 みんなで協力し、楽しく思い出に残る文化祭にしたい。

Q 3 一人一人が責任をもって努力して、団結・協力してがんばる。

(Q 1、Q 4 の回答は省略)

- (2) ついに1年3組の企画は「演劇」に決定！あとは前進あるのみ……

企画の決定に向けて、最終アンケートをとった。その結果は、次のとおりである。

Q. 文化祭に関するクラスメートの考えやホームルーム担任の意見、提案を踏まえて、1年生の文化祭でやってみたい企画案は？

演劇 16人    パラパラダンス 6人    心理テスト屋さん 3人

なんでもいい 3人    その他 7人

過半数に届いていなかったが、企画は「演劇」に決定した。そして、合い言葉を、『自分の役割に責任をもち、みんなで協力し合う文化祭』に決定した。

- (3) いよいよ「演劇」企画の準備スタート！どうなることやら……

どんな台本にするか、どんな役割が必要か、練習や準備をどのように進めていくかなどを考えていく「相談役」を募集した。その結果、4人の「相談役」が決まった。早速、この4人で手分けをして、台本選びにはいった。当初の予定だと、1学期中に台本も役割分担も決定しておくはずだったが、実現できずに夏休みに突入し、7月下旬に台本が『A Love Story ～ある愛の物語～』に決まった。同時に係り分担（監督兼演出、キャスト、照明、音響、衣装メイク、大道具、小道具、プロンプター、ナレーターの9つ）とそれぞれの割当人数も決まった。

- (4) 8月7日、急きょ決まった1年3組集合の日！さて、何人集まるのだろうか！

突然相談役の生徒から「このままでは先行きが不安。キャストの中には、セリフの多いものもあるので、それだけでも決めておいて夏休み中にセリフを覚えた方がいい。」などの意見が出て、急きょ集合することになった。早速手分けをしてクラスメートに電話連絡をした。そして、当日がやってきた。なんと、24人が出席した。出席者に諮ったところ、全員出席していないがやむを得ないという判断のもとに、決められるだけ決めようということになった。監督兼演出、キャスト11人中4人（無事セリフの多いものは決まった）、ナレーターは比較的簡単に決まった。あとは、2学期の始業式に持ち越し、決まったキャストは夏休みの残りを使って各自セリフを覚えることを確認して解散した。

- (5) 文化祭の取り組み“セカンドステージ”スタート！キャスト決まらず大ピンチ！

始業式の日、夏休み中の決定事項を報告して、残りの分担を決定した。その後、各パートごとにスケジュール表を作成し、拡大したものを教室の後ろの壁に掲示して、お互いの進み具合を確認しながら進めていくことにした。しかし、どうしてもキャスト5人分が決まらなかった。相談役、監督、キャストで悩んだ結果、物語の演出上省いても差し支えないセリフはすべて省き、あとは他のキャストにセリフを振り分けた。そして、監督を担当している生徒と担任もキャストの一員に加わるようになった…。

- (6) 文化祭本番直前に迫る！クラス総動員でラストスパート！

キャスト以外は、どこの部署も動きだしが遅かったが、さすがに文化祭がある週にはみ

んな力が入り始め、前日の準備日には、その盛り上がりもほぼピークに達した。かなづちをたたく者、ペンキを塗る者、買い出しに走る者、みんな大忙しで、会場となる剣道場では、キャストたちが真剣な眼差しで通し練習に励んでいた。その傍らで、BGMをかけるタイミングやスポットをあてるタイミングなど、音響係や照明係との入念な打合せも行われた。

こうして、前日準備は無事に終了し、あとは本番を迎えるだけとなった。キャストは若干疲れが出ているようだったが、同時にやるだけのことはやったという充実感もあった。

(7) ついにやってきた文化祭当日 その1 (第1日目は校内発表) 思い切ってやるだけ!

文化祭本番の2日間は緊張感を高めたいということで、キャストは自発的に早朝練習を行った。そして、文化祭が始まり、誰もが心配だったことは、観客が入るかどうかであった。本番を前にキャスト、ナレーター、プロンプター、音響係、照明係は緊張感と観客の心配が入り混じった複雑な表情だった。しかし、案ずることなく開演寸前にはほぼ満員となった。セリフがすぐに出なかったり、かんでしまったりと細かいミスはあったが大成功に終わった。

(8) 文化祭当日 その2 (第2日目は一般公開) 目指せ完全燃焼! 悔いを残すな!

この日も同じく緊張感が高まっていいと言って早朝練習を1回した。2日目は一般公開だったので、1日目とは違った緊張感があった。開演直前には、保護者や他校の友達、中学生などでいっぱいになった。演技も心なしか迫力が増し、細かいミスはあったものの大成功に終わった。観客からは連日大きな歓声と拍手をいただいた。何よりも終わったときの達成感、充実感、感動にあふれた表情は今も全員の脳裏に焼き付いていることだろう。



写真は本番風景

## 5 結果と考察及び反省

文化祭が行われた翌週のロングホームルームの時間で総括を行い、文化祭はひとまず完結することにした。その内容は、担任が各係へのメッセージを綴ったホームルーム通信を基に感想を述べ、各係のチーフも代表で一言ずつ感想を言い、最後に全員で副担任の先生にお礼を言って終わるといったものだった。突然、そこへ思わぬ朗報が舞い込んだ。何と1年3組の演劇が「文化祭大賞」を受賞したのだ。その時の生徒の感動と喜びは言うまでもない。

担任が途中でキャストに加わる事態になってしまったが、副担任の協力を得ながら担任としてできる限り全般にわたって目を配るように心掛け、必要に応じてアドバイスをしてきた。各係のチーフは予想以上にリーダーシップを発揮し、その指揮のもとに生徒一人一人がホームルームの仲間とかかわる中で、それまで以上に友好を深めたことも多くの感想文から読み

取れる。その結果として、大賞を受賞するという感動の閉幕となった。しかし、一方では本格的に活動した20日余り、ほとんど参加しなかった生徒もわずかながらいたことが、とても残念で仕方がない。今後は、是非ともそのような生徒への適切な指導方法について時間をかけながら学んでいきたい。

## 6 生徒の感想文より

- ・ 大賞をとってみんなで喜び合ったとき、劇をやって本当によかったと思った。
- ・ 終わった瞬間みんなもお客も笑顔だった。やればできるんだなあ。やってよかった。
- ・ 裏方だったけど、本番をみて、物語の内容にも友達の演技にもあらためて感動した。
- ・ 演劇をやったのは小学校以来。練習が楽しかったし、達成感を味わうことができた。
- ・ 最初は嫌だったけど終わってみたら、やっぱりやってよかったとつくづく思った。
- ・ みんなで協力してすごいものができた。
- ・ 疲れたけど、もう一回やりたい。
- ・ 劇が大変だった分友達の仲が深まった。
- ・ 多くの人と話せるようになれてよかった。
- ・ 泣いてくれたお客さんを見て感激した。
- ・ この数日間、「みんなでやっているんだなあ。」と実感したし、帰りが遅くても楽しかった。

## 7 最後に

今回ビデオの収録など副担任には、かなり協力していただいた。それだけの協力が得られたのも、これまで連絡を密にしながら、連携をとってきたからだといえよう。文化祭のような大行事には副担任との協力体制が必要不可欠であることを改めて感じた。

親バカ日誌  
⑤9 中3組ホムルー通信

1年3組ホムルー通信  
**ホムルー**  
号外  
2000.09.28

# 速報! おめでとう!

## 1年3組劇『A Love Story』

### 文化祭大賞(優勝)を受賞!!

正式には、「最優秀賞」で、巧みNo.1です。

お詫び...  
「自分で自分のことをみんなに美男子に書いてほめてあげたい。」  
1年3組... 担任 黒後 茂

文化祭大賞  
最優秀賞  
1年3組『A Love Story』

東京国立近代美術館  
校長 黒後 茂

何だこれとびっくりするくらい副担任黒後茂先生のお力のおかげで、優勝しました。

「文化祭最優秀賞」を頂くことが出来たのは、本当に嬉しかったです。この賞を頂くことが出来たのは、本当に嬉しかったです。この賞を頂くことが出来たのは、本当に嬉しかったです。

担任 黒後 茂

## 実践事例2 面接週間を活用した遅刻指導

——遅刻に対する意識を高め、学校生活の適応を図る指導の工夫——

### 1 学校、生徒の実態

B校は創立22年の学校で、生徒の約6割が自転車通学、約3割がバス通学である。この状況からも天候や交通事情によって登校に影響を来すことがわかるが、それにしても実態として遅刻や欠席、早退などを繰り返す生徒が多い。生徒自体はとても素直であどけない者が多く、特に反抗的な態度をとるようなことも少ない。

対象とする2学年のこのクラス（在籍29名）はクラス替えによって、ホームルーム担任（以下、「担任」とする）とクラスメートが変わり、新たな気持ちと緊張感をもってスタートした。しかし、1か月もたつと緊張感も消え、遅刻や欠席が目立つようになった。ショートやロングのホームルームの時間を通して何度も注意を促したが生徒の意識はあまり変わらず、その数はますます増えるばかりだった。実態として、概ねクラスの①1/3は遅刻・欠席がほとんどない生徒、②1/3は時々遅刻・欠席のある生徒、③1/3は毎日のように遅刻あるいは欠席をする生徒と、分類することができる。担任としては、特に③に当たる生徒について、このままでは進級や卒業が非常に厳しい状態になると心配している。

### 2 指導のねらい

1学期は、遅刻や欠席の多い生徒に十分な個別指導ができずにいたため、その改善が見られなかった。2学期当初には、1週間の個人面接週間が設定されていたので、それをうまく活用して2学期から遅刻や欠席に対する意識を高め改善を図ろうと考えた。特に遅刻や欠席のある2/3の生徒を重点に面接をし、改善策を話し合い遅刻や欠席を減らすことで学校生活の適応を図ることを目的とした。

### 3 取組み

(1) 面接週間前の取組み（9月1日始業式後のロングホームルーム活動）

- ① 意識調査のアンケートを行った。
- ② 遅刻に対する考え方などの話をし、9月は遅刻防止月間にしようとして強調した。
- ③ 個人面接の資料として1学期の学校生活の取組みについての反省と2学期の目標について記入し提出させた。

～面接資料の一部抜粋～

< 1学期の反省 >

- ①100点満点で採点すると1学期の充実度は何点？
- ②自分としてよく頑張った点は何か
- ③自分としてあまり頑張れなかった点は何か

< 2学期の目標 >

- ①一番頑張ろうと思うことは何か
- ②まず9月の1か月間何か具体的な目標を立てて取り組もう
- ③目標が達成できなかつたら何か自分にペナルティーを科そう



(2) 面接週間の取組み

- ① 特に遅刻や欠席の多い生徒については早く指導し、遅刻の改善を図ろうと考え、面接の順番を優先的に組んだ。
- ② 面接資料を基に遅刻の原因について確認し合い、どうしたら改善できるか一緒に話し合った。その主な内容は、起床時間の設定、登校準備にかかる時間の見積もり、通学方法の見直し、友人との待ち合わせによる時間の遅れ、雨天による通学所要時間の誤差などであった。これらに対し、原因を自覚し、改善の努力をする意識をもたせるようにした。
- ③ 1週間に何回遅刻しないで登校できるか、実現可能な目標をもたせ、そして毎日自分で出欠状況をチェックできるように「個人出欠状況チェック表」を作成し、配布した。また、出欠状況だけでなく授業の欠時も確認できるように工夫した。

[資料①]

出欠状況チェック表 (一部抜粋)

2年3組〇番 氏名 〇〇 〇〇

| 9月 |   | SHR | 1校時 |    | 2校時 |    | 3校時 |    | 4校時 |    | 5校時 |    | 6校時 |    |
|----|---|-----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| 11 | 月 | ○   | ○   | 英語 | ○   | 倫理 | ○   | 家庭 | ○   | 家庭 | ×   | 学系 | ○   | 学系 |
| 12 | 火 | ×   | ○   | 体育 | ○   | 英語 | ○   | 国語 | ○   | 化学 | /   | 美術 | /   | 美術 |
| 13 | 水 | /   | /   | 数学 | ×   | 日史 | ○   | 学系 | ○   | 学系 | ○   | HR |     |    |
| 14 | 木 |     |     | 倫理 |     | 国語 |     | 体育 |     | 英語 |     | 学系 |     | 学系 |

- \* 9/11 遅刻しないで登校、5時間目授業遅刻あり。
- \* 9/12 1時間目前に遅刻登校、5時間目から早退。
- \* 9/13 2時間目途中で登校。

(3) 面接週間後の取組み

- ① 1週間単位で目標が達成できたかどうかを確認し合った。目標の達成具合によって誉めたり、励ましたり声掛けをして常に意識付けさせるようにした。
- ② 1時間目の授業に間に合えば朝のホームルームは出なくても良い、という考えの生徒がいるので、日直が新聞記事や雑学豆知識を読むなど朝のホームルームの内容を工夫し、充実を図った。
- ③ 11月8日のロングホームルームで意識調査のアンケートを行った。
- ④ 11月8日のロングホームルームで2か月を振り返り、目標に対する自己評価を行った。

4 結果と考察

(1) 面接週間実施後の生徒の遅刻・欠席の状況を一学期と比べると以下ようになる。

- ① 目標に対する自己評価で、達成できていると答えた生徒は16人中5人。
- ② 担任から見て目標を意識してよく努力していたと評価できる生徒は16人中8人。

|                  |        | 月     | 4月    | 5月    | 6月    | 9月    | 10月 |
|------------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
|                  |        | 授業日数  | 16日   | 21日   | 24日   | 23日   | 23日 |
| 指導<br>対象外<br>13人 | 遅刻・欠席数 | 16日   | 19日   | 30日   | 35日   | 25日   |     |
|                  | 遅刻欠席率  | 7.7%  | 7.0%  | 9.6%  | 11.7% | 8.4%  |     |
| 指導<br>対象<br>16人  | 遅刻・欠席数 | 119日  | 195日  | 289日  | 199日  | 193日  |     |
|                  | 遅刻欠席率  | 46.5% | 58.0% | 75.3% | 54.1% | 52.4% |     |

$$* \text{ (遅刻・欠席率)} = \frac{\text{(遅刻回数)} + \text{(欠席日数)}}{\text{(授業日数)}} \times 100$$

\* 指導対象外13人の4、5月に入院により12日分の欠席者が1名あり。

\* 指導対象16人の10月に入院により12日分の欠席者が1名あり。

(2) 遅刻が改善された生徒の例

指導対象生徒16人中、担任の評価が良かった2人についての指導は次のとおりである。

|     |        | 月     | 4月    | 5月    | 6月    | 9月    | 10月 |
|-----|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
|     |        | 授業日数  | 16日   | 21日   | 24日   | 23日   | 23日 |
| 生徒A | 遅刻・欠席数 | 5日    | 10日   | 19日   | 10日   | 12日   |     |
|     | 遅刻欠席率  | 31.3% | 47.6% | 79.2% | 43.5% | 52.2% |     |

登校時、いつも友達と待合せをしているため遅刻が多かった。そのため待合せ時間を過ぎたらお互いに先に行くように決めたところ遅刻が改善された。そして、時間ぎりぎりに教室に走り込んでくる時は、「遅刻じゃないでしょ」と遅刻に対する意識をもった言葉が出るようになった。担任としては、その気持ちだけでも嬉しく感じた。しかし、10月には生徒指導部による学校全体の頭髮指導があり、その指導を受けた生徒Aは遅刻に対する意識が低下していった。

|     |        |       |       |       |       |      |
|-----|--------|-------|-------|-------|-------|------|
| 生徒B | 遅刻・欠席数 | 10日   | 13日   | 23日   | 4日    | 2日   |
|     | 遅刻欠席率  | 62.5% | 61.9% | 95.8% | 17.4% | 8.7% |

1学期バス通学をしていたが、不定期になりがちなバス通学から自転車通学に切り替えた。通学時間が正確になったことで遅刻が改善された。更に遅刻をしなくなったことで、雨天時にはバス通学をしているが、余裕を持って登校する意識が身に付いた。



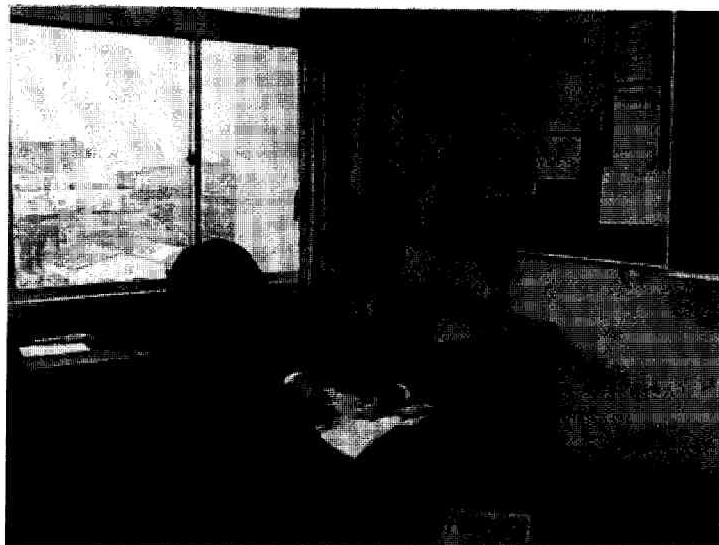
### (3) 考察

遅刻・欠席の推移から分かるように、1学期は月を追うごとに遅刻・欠席数が増えていった。2学期に入り、遅刻指導に取り組んだところ、9月には随分と改善することができた。個別に声掛けをして遅刻に対する意識を常にもたせたり、具体的に数字として出欠状況を確認し合ったことが、成果として現れたのではないかと考えている。しかし、10月に入り、学校全体で頭髪指導の強化があり、生徒の意識に余裕が無くなっていった。指導の重点ポイントが頭髪指導にとらわれ、遅刻のさらなる改善向上を図ることができなかった。B校の生徒の実態から見て、生徒に対して複数の要求は、あまり良い結果を得られないのではないかと。

2学期の2か月間を生徒に自己評価させてみたところ、低く評価をつけた生徒が多かった。これは数が減っても遅刻・欠席率が50%を超えており、遅刻・欠席をしているという実感の強い現われで、生徒が意識をしていることが分かる。担任の評価が生徒の自己評価より高くなっているのは、数字上は満足できないが、内容として遅刻の度合いが良くなっているからであり、明らかに1学期の時より早く家を出る努力をしている生徒が増えていた。

意識調査のアンケートで、数名が9月1日の時点で「ズル休みをしたい」、「卒業できなくてもいい」、と答えていたが、11月8日のアンケートでは、「そうは思わない」と答えるようになっていた。学校生活に適應している現れともとれる。指導対象に挙げた16人すべてが期待通りにはいかなかったが、生徒の実態を把握し、強制ではなく、話合いの中からの確な助言を行うことが効果的なことは確かである。また、教員が忙しさを理由に取組みを中断したり、声掛けを怠ったりすると、すぐにその結果がマイナスとなって現れることも見逃せない。

人とかかわりを好まない生徒が多くなっているが、自分を認めてもらいたいという気持ちは誰もがもっているはずである。具体的な取組みを通して、個別対応を根気よく行うことが生徒指導に重要なことだと言える。



面接指導を行っている様子

### 実践事例3 生徒のリーダーシップと集団の一員としての自覚を深める指導の工夫 ——2年間にわたる体育祭応援団の指導を通して——

#### 1 学校・生徒の実態

C校は開校から15年という、歴史が浅く、いわゆる“伝統”というものがあまり存在しない中堅校である。真面目でおとなしい生徒が多く、集団の中において誰かがリーダーとして行動してくれるのを待って、それに乗っかってついて行こうという生徒がほとんどである。

体育祭に関しては、開校以来、保健・体育科が中心となり教員主導で運営されてきた。いろいろな場面で教員が先頭に立って生徒を指導し、整然とした体育祭が毎年開催されてきたが、生徒の自主性という点ではいまひとつ物足りない面があった。

そのためか、応援団についても開校10周年を過ぎたころから活動に陰りが見え始め、一昨年は希望者が激減したため、応援団そのものが廃止された。21クラス中17クラスで希望者が出ず、じゃんけんで無理矢理決めざるを得ないという状態であった。

しかし、昨年、校内の事情により体育祭の開催自体が危機に瀕した際に、当時の3年生が中心となり、応援団は復活した。「体育祭がなくなるかもしれない!」という危機感を感じたこともあって、応援団が大活躍し、体育祭はそれまでにない“生徒の、生徒による、生徒のための体育祭”となった。

その中でも、以前は教員が行っていた集合指導、行進指導を顧問の助言を適切に受け入れ、応援団が取りしきり、定刻の10分前に全校生徒を整然と集合させてみせたことは驚きだった。

#### 2 指導のねらい

応援団顧問として2年続けて指導するに当たり、昨年度の自主的な活動が3年続けば、いわゆる“伝統”となると考え、以下のことを念頭に指導に当たることとした。

- ① 生徒に集団を組織し、何かを成し遂げることの意義とその手法を伝え、彼らのリーダーシップを育成すること、そして集団の一員としての自覚を深めることを目指す。
- ② そのため最初から結論を与えることはせずに、まずはリーダーの生徒に考えさせ、そのあと、タイミングを図りながら助言、動機付けを行い、判断させる。
- ③ 生徒の意識が、「体育祭をなくしてはいけない。」という危機感があった昨年ほどは高くないことが予想されるので、応援団全体への動機付けも頻繁に行う。

なお、指導の対象となる応援団の人数構成は次のとおりである。

応援団生徒（赤団 81名 青団 67名 黄団 71名 合計 219名）

#### 3 取組み

##### (1) 3年生への動機付け（6月中旬）

何とんでもなく団の中心となっていくのは、最上級生の3年生であるので、応援団員の希望生徒の集まりをもち動機付けを行った。かつては、結団式の時にいきなり応援団の生徒全員を集め、そこで団長を初めとした総務を決めていたのだが、団によっては団長すら決定できず、とうとうなすり合いとなってしまい、期待して団員となった1、2年生を失望させることも少な

くなかった。そこで昨年度と同様に3年生の応援団希望生徒を集め、「去年と同じ体育祭を今年、来年と続ければC校の伝統となるので頑張ろう。」と激励した。また、すでに団分けは決定されていたので、①ある程度、団長などの役員案を決めておくこと、②全団員が勢ぞろいする結団式の進め方を計画しておいた方がスムーズに活動を開始できる、という2点を助言した。一昨年は希望者がいなかった学年なので、はたして何人集まるか心配したが、当日は会場のL教室に入りきれないぐらいの生徒（約100名）が集まった。希望者がほとんどおらず、じゃんけんで無理矢理決めていた数年前とは隔世の感があった。あらためて昨年度の応援団が残した功績を再認識した。

## (2) 3年生への具体的な助言（6月中旬）

この時点で3つの団がそれぞれ70人を超える規模になることが予想された。（昨年度は3団合わせて約90人であった。）これほどの規模の集団を機能させ、一つのことを成し遂げるには、組織がしっかりしていないことには不可能であると考え、3年生の希望者を再び集め、どのようにしたら集団を機能させることができるか、組織の構成の仕方、また1・2年生をどのように勧誘したらよいかなどの助言を行った。

### （資料①）

この資料をすぐに配布するのではなく、「まず何をしたらいい？」といったような

問い掛けをして、まずは生徒に考えさせてからヒントを与え、最終的に配布し、助言した。

## (3) 結団式（6月末）における動機付け

C校の結団式は、応援団員が初めて一堂に会し、団長を初めとした役員を決め、9月中旬の体育祭本番までの活動のスタートとなるものである。この時は、団長候補者の生徒など、数名が整列指導などで奮闘していたが、他の3年生のほとんどは関係ない顔をして「外野」にいた。顧問として、「リーダーだけが「内野」で頑張っているようでは、組織は機能しない。」と苦言を呈し、1・2年生に今年の応援団の責任の重大さを話し、自覚を求めた。

## (4) 夏休み中の助言（7月中旬から8月末）

9月中旬が体育祭であるため、各団とも、パネル作成、演技内容の決定などのほとんどを夏休み中に行うことになる。活動計画の作り方、1・2年生への指導の仕方、時間の効果的な使い方などを、まず各団のリーダーに考えさせてから助言をすることにした。また応援団員全員を2度にわたって集め、施設の利用、使用後の片付けなど、昨年度の応援団の意識の高さなどを紹介し、良い伝統を守っていかうという呼び掛けを行った。

## (5) 開会式の整列指導・入場行進への助言（体育祭予行の2日前）

昨年同様に応援団が機能して、開会式をスムーズに時間厳守で行うことが体育祭の成功につながるだけに、リーダーにどのようにしたら全校生徒を整然と動かすことができるかの問い掛

### 資料 ①

どのように応援団（組織）を運営するか  
2000.6

50～60人からなる組織を機能させて何かを成し遂げるには、①ちゃんとした組織を作る。②ちゃんとした活動計画を立てる。③前もって周到な準備、打ち合わせをする以上三点が重要である。

この応援団の活動を通して全員が“リーダーシップ”のとり方を経験しよう！

★組織をどう作るか

①まず3年生の団員を確定してその中で総務（中心となる人間）を決める

②そのメンバーで組織の構成を考える

|     |       |      |               |   |    |
|-----|-------|------|---------------|---|----|
| (例) | 団 長   | 1名   | (3年)          | } | 団員 |
|     | 副団長   | 3～4名 | (3年-2～3 2年-1) |   |    |
|     | 会 計   | 2名   |               |   |    |
|     | 学年連絡係 | 3    | (2年-1 1年-2)   |   |    |

＊必要に応じて係りを作り責任者を決める。(例)ダンス、パネル、衣装など

＊この際、男女比、学年、クラスのバランスを考慮するのが大事！

③1・2年生の団員をどのように勧誘したらいいかを3年生の総務で検討する。

(例)昼休み、放課後に各ホームルームを回って訴える。ビラ、ポスターの作成など

＊必ず総顧問、該当クラスの担任と連絡をとって行うこと

④上記③が固まった段階で3年生の団員を集め、説明、日程、役割分担を決める。

・団員になってくれる生徒の氏名の把握 → 応援団員が確定

ここまでがちゃんとできれば応援団は必ず機能する！

けを行った。昨年の経験を憶えている生徒もあり、以下のことを確認した。

① 一般生徒に対して、各団で予行の前日、本番の前日に、通常より早く登校してくれることを呼び掛ける。

② 一般生徒が登校・更衣・集合を迅速にできるように、当日の役割分担、配置を細かく割り当て、打合せを綿密に行う。

その結果、すべての団が資料②のような細かい役割分担を作成して、予行・本番に臨んだ。(資料②)

(5) 予行終了後の助言

予行は、雨天のため体育館で行われた。集合させる場所等が変わり、入場行進の練習ができなかったが、応援団の生徒はまずまず機能していた。終了後、応援団員を残し、顧問として気付いたことをコメントして激励した。

(6) 体育祭当日

前日の雨のためグラウンドの状態が悪く、開始時刻を1時間遅らせて開始した。ただ、開始時刻の午前10時が決定し、応援団に告げられたのは、わずかその10分前であった。しかし、各団とも打合せを綿密にやっていたため、その決定の連絡があったあとに全団合同のミーティングを行い、「打合せどおりに行動して、あと10分で全校を集めて開会式を定刻通りに始めよう。」とお互いを励まし合い、メガホンを片手にそれぞれの持ち場に散っていった。そして10分後、全校生徒の集合は完了し、団長代表の「昨年と同じぐらい素晴らしい体育祭にしよう！」という呼び掛けに拍手が起こり、定刻通り入場行進が始まった。

そのあとは応援団が招集係をサポートしたこともあり、スムーズに流れ、彼らが創意工夫して制作したパネルが見守る中、10分間の応援合戦を含め全プログラムを予定通りに(1時間遅れて開会したにもかかわらず)終了することができた。

資料②

体育祭予行・本番の割り分担

青 団

9月11日(月)

▲ 練習場(江東体育館)にて  
応援団全員で集まり口で呼びかけ 予行の日は8時15分登校を徹底する

9月12日(火) 文化祭代休

9月13日(水)

★ 朝 集合集合 7:30 → 7:45から生徒に呼びかけ、集合開始

(配置)

1 旗手組担当 M, S, T, K, O, K, N, K, S  
2 旗手 O, T, S, H, T, K, T, K, H  
3 旗手 E, W, H, A, O, O, S, K, F  
4 旗手 B, K, O, S, T, H, S, S, K  
5 旗手の補助員 N, E, Y, Y, Y, Y, K, Y, S  
6 旗手 1年 F, H, H, W, F  
7 旗手 2年 S, S, S, T  
8 旗手 3年 M, M, T, H

★ 旗手は各クラス、男子が前になって2列です

9月14日(木) 体育祭当日

★ 朝 集合集合 7:30 → 7:45から生徒に呼びかけ、集合開始  
配置は13日(水)と同じです

全員で協力して呼びかけましょう！  
生徒の手で体育祭を成功させましょう！  
がんばろう！青団！



4 結果と考察

(1) 生徒のアンケートより (対象 応援団員 156人 回収率 71パーセント)

- Q 1. あなたはなぜ応援団活動に参加したのですか？
- ①自分から希望して 59% ②友人、先輩からの誘いで 33% ③嫌だったけどしかたなく 4% ④その他 4%
- Q 2. 2年続けて応援団に参加してみてどのように思いましたか？ (解答者40人)
- ①さらに楽しかった 58% ②昨年と同様に楽しかった 20% ③まあまあ 18% ④期待はずれだった 4%

Q 3. 今年、初めて応援団に参加してみてどのように思いましたか？（解答者 116人）

- ①とても楽しかった 58% ②楽しかった 32% ③まあまあ 7%  
④楽しくなかった 3%

Q 4. 来年の応援団をやりたいと思いますか？（1、2年生対象 解答者 116人）

- ①やりたい 71% ②やりたくない 1% ③わからない 28%

Q 5. 応援団が指導しての定刻通りの開会、閉会を実現させたのは何だったと思いますか？  
次の中から運んでください。（複数回答可）

- ①全校生徒の協力 74% ②応援団のまとまり 57% ③C校生のまじめさ 19%  
④リーダーの適切な指示 42% ⑤応援団総務の適切な計画 28%

Q 6. 応援団の活動で身に付けられたものがあるとすればそれは何ですか？次の中から選んでください。（複数回答可）

- ①協調性 50% ②社交性 32% ③度胸 27% ④リーダー性 35%  
⑤忍耐力 20% ⑥計画性 18% ⑦責任感 31% ⑧団結力 64%

Q 7. 今年の応援団活動を振り返ってみて、感想、もしくは来年度へ向けてのアドバイスがあったらお願いします。

- ・3年生がしっかりと自分がやることを把握して下級生にきちんと指示できれば、団がまとまるので、3年生がきちんとリーダーシップをとることが大切だと思う。
- ・団長一人に責任を持たせてはダメ。大人数を動かすときには、それぞれに責任を分担した方がよい。
- ・人数が多くてまとまるかわからなかったけど、先輩たちが先頭にたってがんばってくれたのでよかったです。
- ・これからも続けてほしい。体育祭になくってはならないもの。応援団がないと盛り上がりには欠ける。今まで以上に人が好きになりました。

## (2) 2年間の指導を終えて

前述したとおり、一昨年は希望者が集まらず廃止された応援団が、昨年の復活を最初のステップとして、体育祭を実施する上で必要不可欠な要因となったことが、団員対象に行ったアンケートからうかがい知ることができる。特に3年生は、1年次には応援団の希望者がほとんどおらず、応援団そのものが廃止され、2年次には1学年上の先輩たちの指導のもと大いに盛り上がった体育祭を経験し、そして今度は自分たちが最高学年として迎えた体育祭であった。彼らの集団の一員としての意識が、立場と環境の変化に伴って多少なりとも深まったと考えられるのではない。

ただ、人数が増えたこともあり、活動計画の立て方など細かく助言したつもりであったが、団によってはうまく機能せず、混乱が生じたこともあったりした。また、リーダーシップを振るうことに慣れていないことから、人間関係に悩んだ生徒も少なくなかった。今後、更に適切な助言、動機付けを行う力が教員に求められている。

最後に、生徒がこの応援団の活動を通して集団の一員としての自覚を更に深め、リーダーとしての経験を積み、この体育祭を“伝統”として定着させることを期待している。

## 実践事例 4 連続した学校行事を活用し、集団の一員としての自覚を深める指導 ——各行事のつながりを大切にするホームルーム指導——

### 1 生徒の実態

D校は今年で創立60周年を迎える工業高校で、ここ数年学習面、生活面など学校全体の雰囲気はかなり改善されてきている。本ホームルームは、都立工業高校でも数少ない科であり、ほとんどの生徒がはっきりとした目的をもって入学してきている。1年生として新たに入学した緊張感もあって、1学期の出席状況はとても良かった。学習面でもほとんどの生徒が良好な成績を取っていた。2学期になって、何人かの生徒に、夏休み中の生活習慣がなかなかおらない、学校に慣れたなどの理由から、遅刻が増えたり、提出物の提出状況が悪くなるなど、学校生活全般で気が緩んでいる状況が見られる。しかし、全体としては1学期同様、充実した学校生活を送っている。

ホームルームとして取り組む学校行事は、1学期は5月末に行ったスポーツ大会（1日で学年別にバレーボール・ミニサッカー・ドッジボールの3競技を行った）だけであった。そのため、席が近い生徒、出席番号が近く実習などで一緒になる生徒など、一部で仲が良い生徒や新しい友達もできたが、ホームルーム全体で一つにまとまって行う機会がこれまでなかった。2学期が始まるに当たって、行事が多く予定されているため、担任としては、全員で協力することができるかどうか、とても心配であった。

### 2 指導のねらい

D校では、2学期には学校行事が多数予定されている（次頁参照）。しかも、すべての行事を「行事週間」のように短期にまとめて集中して行うのではなく、各行事の間に期間をおいて、それぞれに向けて準備ができるように設定されている。そこで、ここでは次に挙げるようなねらいをもって行事に取り組むこととした。

- (1) 教員の指示に従って行動する、あるいは指示がなければ動けないという状況ではなく、生徒が積極的に、自主的に各行事に参加し、自分たちの手で作り上げたという成就感、達成感が感じられるように取り組む。
- (2) 連続して行われる各行事後に反省を行う。そして、それぞれの良い点は継続し、悪い点は反省して改善するよう努め、次の行事に生かすよう配慮するなど、各行事のつながりを大切にする。
- (3) 学校行事を通してホームルーム内の友人関係を広める、あるいは深める。また、1年生の他のホームルームの生徒や2・3年の上級生、多くの教職員などとの交流を広め、深める。
- (4) 日常の授業の成果や、自分の持てる力が発揮できるよう、各自が真剣に、かつ全力を出しきるように取り組む。



## 2 学期に行う学校行事の予定

### ①水泳大会

9/11(月)に予定されていたが、雨天のため12日(火)に延期して実施。各学年ごとに、全員がプールサイドに集合し、授業2時間分の時間で、個人種目やリレーなどを行う。個人表彰とホームルーム表彰がある。

### ②体育祭

10/4(水)1年生は学年全体で組体操を行う。9/20(水)から臨時時間割となり、組体操の練習の時間が毎日2時間ずつ確保される。

### ③文化祭

11/4・5(土・日)初日の午前中は各団体の準備と開祭式。初日の午後と2日目は一般公開。

### ④マラソン大会

11/24(金)多摩川河川敷を約9km走る。各自のタイム・着順などを競う個人的な面と、タイムをホームルーム全体で合計し、合計タイムが速い順に表彰する集団的な面がある。

※なお、今回は上記④のマラソン大会については研究の対象から外す。

## 3 各行事に向けた取組み

### (1) 水泳大会

選手の決定は、生徒の希望を取り入れながら、体育の授業で測定したタイムを参考にして決定した。出場選手とホームルームの在籍数の関係で、1人1種目しか出場できないので、リレー選手を優先して決めた。一部の水泳が得意な生徒だけが出場するのではなく、全員で参加し、なおかつ、なるべく良い成績が取れるように配慮した。また、1年生にとっては初めての大会であるため、大会のルールや運営、雰囲気などについて説明したり、体育の授業では、模擬レースを行うなど、生徒の意識高揚に努めた。また、当日体調不良のため競技に参加できない生徒2名を「応援団長」に指名し、競技中の生徒を応援することと雰囲気を盛り上げるよう働きかけた。

大会当日は、事前に指名した応援団長2名は、あまり声を出すことができず、ホームルーム全体として組織だった応援はできなかった。それでも各個人では、声援を送っている生徒が多かった。各生徒がそれぞれ持っている力を最大限に発揮することができ、ホームルーム全体の総合得点は、1年生で2位になることができた。体育の授業で測定したタイムを参考にすると、2位になれたのは大健闘であったといえる。



## (2) 体育祭

選手の決定は水泳大会同様、4月に体育の授業で測定したスポーツテストの結果を参考して決定した。また、例年1年生は組体操を行っており、体育祭前のおよそ2週間ほど臨時時間割となり、毎日2時間ずつ練習した。組体操の練習が始まった当初は、昨年と比較すると見劣りする部分が目立ったが、繰り返し練習することによって、日を迫うごとに上達していった。本番では、多くの生徒が技を完成させ、満足感、達成感で喜んでいる表情をしていた。また、それぞれの技の完成だけでなく、入場から退場まで、一つ一つの動作・姿勢・移動の速さなどにも注意を与えた。そこから発展させて、人の話を聞く際の態度・姿勢なども指導し、集団として、あるいは1学年としての意識を高めるように配慮した。

体育祭は、各科の1～3年生の点数を合計し、科ごとに競う形式で行っている。競技の結果は、学年別に行われる個人種目及び集団種目は、2位や3位が多かったが、ほとんどの種目で高い得点を得ることができた。2・3年生も健闘し、5科で争う総合得点で優勝することができた。また、1年生全員で行う「組体操」も、多くの生徒が練習の時よりもできがよく、ホームルームの生徒の多くが結果に満足していた。



## (3) 文化祭

本ホームルームは、文化祭に向けて、1学期に食品関係の企画を希望したが、D校は設備・施設の関係で食品団体の数を制限している。委員会による選考の結果、希望した企画が通らなかった。そのため夏休み中の宿題として、企画を考え、注意点なども加えたレポートを作成する課題を与えた。提出された企画書を参考に、ロングホームルームの時間に話し合った結果、「ホームラン競争」が選ばれた。この企画は、バッティングセンターのように投げられたボールをお客さんがバットで打つ。ホームルームの生徒はピッチャーと球拾いなどの仕事をするという内容である。

担任として、本校の広いグラウンドを最大限に生かして、楽しい企画となるように、ルールの設定、安全面への配慮、物品の借用、生徒の役割分担などを生徒の力で決定してくれることを期待していた。なるべく担任は口を出さず、生徒が自ら考え、自ら行動できるように助言を与える程度にとどめた。しかし、当日までに短縮授業などによって、文化祭の準備に与えられた時間を有効に使うことはできなかった。中心となるべき文化祭委員3名の中でもなかなか意見をまとめることができなかった。さらに、委員3人で決めたことを他の生徒に十分伝えることができず、他の多くの生徒は何をしたらよいのか、どのようにすべきなのか具体的にわからない状況であった。そのため、事前に十分な準備をすることができず、当日を迎えてしまった。

前日までの準備が十分にできなかったため、始まってすぐにはそれぞれの係の仕事がうま



く機能しなかった。そこで担任が係分担や仕事の確認、時間を勘違いしている生徒への連絡などを行った。すると全体がスムーズに働くようになった。初日が終わった時点で、ホームルームの生徒全員が集合し、本日の反省を行ったところ、建設的で有意義な意見が多数出てきた。それらを参考に細かい点を改良し、翌日はさらにより企画となるように努力してほしいと生徒に話をした。2日目は、なるべく担任が出ていかないで、生徒が自分たちの力で実施することを期待していた。生徒は、朝から各自がそれぞれの仕事をして準備に取り組んだ。始まってからも前日の経験を生かして動いたので、全体的に前日よりも円滑に進行することができた。残念ながら、一部の生徒が係の仕事をさぼる、お客さんが予想以上に来てしまって、お客さんの待ち時間が長くなってしまった、などのいくつかの不都合な点があったが、全体的には生徒が互いに協力して頑張っていた。

#### 4 今回の反省と今後の課題

##### (1) 今回の反省

今回の一連の行事を通して、担任として次のように考えた。生徒の特技・特徴・性格などを十分に理解できていなかったため、生徒のやる気・特性などを生かした役割分担や係の仕事内容などで、配慮することが十分できなかった。「この生徒はこんな一面があったのか。」とか「あの生徒は、地味なことや人の嫌がることを、最後までやり遂げるのだな。」などという新しい発見が各種の行事を行うたびにあった。

また、行事前の担任の対応にも反省すべき点があった。前述のように、すべて担任が指示してはいけないと思っていたし、生徒は指示がなくても、行事の準備などが自主的にできるものと思い込んでいた。しかし、現実には生徒だけの力で全体をまとめていくことには多少不満が残ったり、うまくいかない場面があった。まだ力不足であったり、そのような経験が足りなかったためと思われる。ホームルームの生徒の大多数は真面目で、人の話を聞いて理解し、やろうとする姿勢があるので、動機付けやムードづくり、指導・助言の方法などを工夫すればもっと良い結果が得られたはずであった。

##### (2) 今後の課題

水泳大会では、全体の応援がうまくいかなかった。文化祭では、文化祭委員3人で話し合い、その結果をホームルーム全員に連絡し徹底させることができなかった。この2点に見られるように、数名の限られた人数が全体を指示し、方向付けをしていくことには、今年の時点ではまだ力不足であった。ただし、彼らはやる気や能力がないのではなく、ただそのような経験が足りなかっただけであると考えている。そこで、次の機会からは、各班長や係の責任者など、ホームルーム内の小集団の代表者を交えて、中心となって働きかける生徒の数を増やしてみたいと考えている。幸い、ホームルーム内には真面目な生徒が多く、かつ目立たない場面でも、自分の仕事を確実にやろうとする姿勢・態度がきちんとしている生徒が多いので、来年度はよりよい学校行事にすることができると確信している。今年度の経験を生かし、様々な場面で各生徒が成長し、その持てる力を発揮してくれるよう期待している。また、担任としてもその力を引き出すよう更に指導法の工夫をしていきたい。

## IV まとめ

### 1 まとめ

本年度の特別活動部会では、研究を進めるに当たって、勤務校における生徒の実態と教員(学校)の状況を出し合い、生徒の適応に関する課題、人間関係の希薄さに起因する課題、教員の指導体制に関する課題をまとめた。そして、適応に関する先行研究を踏まえ、本部会の仮説を立てて研究を進めた。

- (1) 教員が意図的・計画的に指導することにより、生徒相互が集団内でのそれぞれの位置付けを確認することができる。
- (2) 生徒一人一人が明確な役割分担をもち、成果をあげることで集団の一員としての自覚を深めることができる。
- (3) 学校生活の充実と向上に関する生徒の自覚が深まれば、不登校や遅刻問題での指導効果が現れる。

という観点から、以下の4つの実践を行い、検証を試みた。

A校 ホームルーム活動を通じての文化祭演劇企画への取組み

B校 面接週間を利用した遅刻指導

C校 体育祭に向けた応援団指導

D校 各行事のつながりを大切にしたホームルーム指導

なお、A・B・Dの3校に関しては、生徒の「学校生活への適応」と「集団の一員としての自覚」に関する事前・事後の意識調査を行った。

実践の結果、A校では、生徒の人間関係が広がるとともに、文化祭大賞を獲得するなど、達成感(満足感)を味わうことができ、ホームルームへの所属感が高まった。B校では、個別指導として面接指導を行い、担任と生徒の関係が深まり、自己の目標を立てたことにより、生徒自身に自覚が芽生え、遅刻指導に一定の成果を得た。C校では、教員の適切な指導・助言により、上級生がリーダーシップを発揮し、体育祭の成功を収めた結果、来年度への抱負を語る生徒が出るなど学校への帰属意識が深まった。D校では、各行事のつながりを通して、教員の生徒理解が深まるとともに、生徒相互の人間関係が深まった。

しかし、こうした実践を行った後の意識調査では、予想に反した結果となった。

### 2 今後の課題

今年度の実践は、必ずしも成功した事例ではない。短期間で生徒の意識を変革させようとしたことに多少無理があった。今後、以下の観点到に立ち、継続して研究を進めていきたい。

- (1) 生徒の意識の変化をアンケートによって実証する方法について研究する必要がある。
- (2) 生徒に「動機付け」をしたり、目的意識をもたせるためには、意図的・計画的に指導を行うことが必要である。
- (3) 生徒の人間関係を広げ、学校生活への適応を図って行くためには、教員の生徒理解をより一層深めることが必要である。
- (4) 特別活動の様々な実践を行うに当たっては、教員間の共通の課題意識と、組織的な取り組みが必要である。